



小田川と山陽道と並行して走る井原鉄道



御城印販売中



井原鉄道HP



井原市観光協会



総社市観光協会



倉敷観光Web



矢掛 DMO



福山観光C協会

発行日：令和8年3月
制作：井原線沿線観光連盟
発行：井原線沿線観光連盟

【企画・執筆：山城ガールむつみ】

歴史&山城ナビゲーター。歴史コンサルタント。

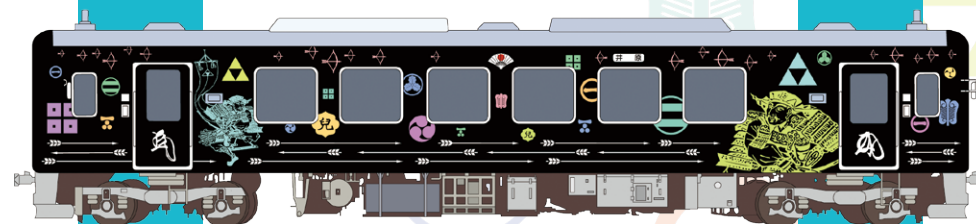
歴×トキ（レキトキ）代表、三浦一族研究会副会長、那珂川町ふるさと大使、一般社団法人城組副理事など。

歴史やお城をテーマにしたイベントやツアー、講座を多数手がける。地域活性のために埋もれている歴史の掘り起こしや現地調査を行い、歴史と城を資源とした町おこしなども手がけている。https://www.rekitoki.com/



歴×トキ

井原鉄道



沿線の山城

出陣のススメ

山城は、街道や河川を押さえる交通の要衝地に築かれ、南北朝時代から戦国時代にかけて、地域の政治、軍事、文化、経済の拠点として重要な役目を果たしてきました。その姿は実に多様で、ひとつとして同じ形の山城はありません。建物が残ってなくても、地形や立地が、かつてここに築かれた山城の存在意義を今に伝えてくれます。さらに、現地に残る遺構が訪れる者を歴史の旅へ誘ってくれます。

／歴史の宝庫／



井原鉄道沿線には、古代から現代へと脈々と流れる壮大な歴史が息づいています。
戦国列車に乗って、時を超えるロマンの旅へ出かけましょう！



敵の侵入を防ぐため、山城には堀や土塁といったたくさんの仕掛けが施されていました。山城用語を覚えて、山城めぐりを楽しみましょう！

どるい
土塁 土を盛り上げ、固めてつくった壁のこと。

よこぼり
横堀 曲輪のまわりにつくられた堀のこと。山城の横堀は
おもに、水を張らない「^{からぼり}空堀」でした。

**たてぼり
豎堀** 山の斜面に上下方向に掘られた空堀のこと。豎堀を連続して並べたものを「畝状豎堀群」といいます。

こぐち
虎口 曲輪の出入口のこと。「喰違虎口」「枅形虎口」など、
堅固な様式へと発展していきました。

横矢 土塁や石垣の塁線を曲げることによって、側面から攻撃ができるようにした構造のこと。

山城のほとんどは私有地となっていて、トイレなどの設備也没有。マナーを守ってお楽しみください。道中には珍しい箇所もあるので、山登りに適した服装と、スニーカーやトレッキングシューズなど滑りにくい靴でお出かけください。



『太平記』に描かれた戦いの舞台！

福山城 (総社市)

登山口まで 駐車場あり

最寄り駅 総社駅

60分



福山城は、標高302mの福山に築かれた山城です。その北麓には山陽道が通り、古くから交通の要衝として重要な役割を果たしてきました。いつ福山城が築かれたか定かではありませんが、南北朝時代には、『太平記』にも登場する熾烈な戦いの舞台になりました。

戦国時代には、毛利氏の支配下に置かれ、天正10年(1582年)の備中高松城の戦いのときには、毛利方の城として機能していたと伝わっています。

山頂の曲輪は、中央に設けられた土塁によって南北に分けられており、城内最高所にあたる南側が本丸と考えられています。この土塁には、石積みを伴う開口部があり、ここがかつての城門跡と伝えられています。また、この曲輪内には断続的に掘られた溝状の遺構が残されており、防御施設の一つだと考えられています。

福山城は、かつてこの地にあった福山寺が、いずれかの時期に城郭化されたものと考えられています。その詳細は明らかになっていませんが、山頂から望む雄大な景色や、今も残る遺構から歴史ロマンを感じることができます。



福山城 溝状の遺構



福山城 城門跡



数十万の兵にたった1500騎で挑んだ福山合戦

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇による建武の新政がはじまりますが、それまで後醍醐天皇に味方していた足利尊氏が反旗を翻します。しかし、尊氏は、京を追われ九州に落ち延びました。

やがて、勢力を立て直した尊氏は、弟の足利直義とともに再び京を目指し、建武3年(1336年)、大軍を率いて進軍を開始します。その途中、京に向かう直義軍と、その行く手を阻むため、福山城に立て籠もった後醍醐方の大井田氏経の軍勢が激突。これが『太平記』にも描かれた「福山合戦」です。氏経はわずか1500騎で、直義率いる数十万とも伝わる大軍を迎え討ち、戦いは三日三晩に及んだといわれます。おびただしい戦死者が出た壮絶な戦いの末、氏経は福山城を脱出。何度も追撃されながらも、氏経は備前の三石まで逃れたと伝えられています。

この戦いのわずか七日後、尊氏は湊川の戦いで楠木正成を討ち、京へと上り、やがて室町幕府を開くこととなります。まさに、時代の大きな転換点において、福山城は歴史の舞台となったのです。

こうざん

幸山城

福山の尾根に築かれたもうひとつの山城

幸山城は、福山の山頂から北へと下る尾根筋に築かれています。幸山城は、伝えによると、鎌倉時代には庄氏の城で、のちに庄氏が猿掛城(矢掛町/倉敷市)へ本拠を移すと、室町時代には細川氏の家臣石川氏の城となり、戦国時代にはたびたび歴史の表舞台に登場しました。

16世紀中頃、石川氏は備中国の有力国人の三村氏と関係を深め、さらには毛利氏に従って活躍しました。一時は、毛利氏と敵対する尼子氏に幸山城を奪われましたが、毛利氏の援軍を得た石川久式が奪還に成功しました。

しかし、やがて毛利氏と三村氏の関係が悪化すると、三村方の石川氏の守る幸山城は毛利軍に攻められ落城。その後は毛利方の城となり、清水宗治などが城主となりました。

その後、高梁川以東が宇喜多氏の領国になると、幸山城は宇喜多方の城になり、関ヶ原の合戦後には廃城となったようです。

幸山城は、「西の丸」「東の丸」と呼ばれる二郭で構成され、周囲を急崖に囲まれた天然の要害となっています。西の丸の南端部には土塁があり、その土塁の北西端部に櫓台と思われる高まりが残ります。また、山陽道と高梁川が一望できる東の丸からの眺めは素晴らしく、幸山城の存在理由を体感することができます。



幸山城からの眺め

福山には、城が築かれる前から「福山寺」と呼ばれる山岳寺院があったといい、古くから信仰を集める霊地として知られていました。

また、福山の北麓には古代の官道山陽道が通っており、その沿道には作山古墳や造山古墳、さらには国分寺や国分尼寺といった古代の重要施設が並んでいます。これらの遺跡が物語るように、この一帯は古代より備中国の中心として栄えてきました。

福山城が築かれた背景にも、こうした地理的・歴史的な重要性が深く関わっていたと考えられ、福山からの景色は、時代を超えて幾重にも折り重なる歴史の層がこの地に息づいていることを語りかけてくれます。



高越城（井原市）

最寄り駅 早雲の里荏原駅

登山口まで

35分

駐車場あり



高越城は、眼下に小田川と山陽道を望む交通の要衝に築かれた山城です。さらに、笠岡から矢掛方面へ北上する街道が山陽道に合流する地点を押さえる位置にあることから、備中と備後をつ結ぶ戦略的にも重要な城だったと思われます。

高越城の起源は定かではありませんが、古くは元寇の際、下野国の有力御家人である宇都宮貞綱が九州に向かう途中、山陽道の抑えとして築いたとも伝わります。また、正平6年（1351年）の史料には「於備中国荏原高越城」と書かれていることから、この頃には何らかの施設が存在したと思われます。

享徳2年（1453年）には、伊勢盛定が高越城を居城としていたとされ、この頃には、備中伊勢氏の本城だったことがうかがえます。やがて、伊勢氏が毛利氏の配下に下ると、高越城には毛利家の重臣戸氏の家臣が入ったと伝えられています。

高越城の山頂部から南西に延びる尾根筋には山上山城、南東に延びる尾根筋には横畑城というふたつの城が存在します。両城とも、高越城の出城だと地元には伝わっています。

北条早雲生誕の地と伝わる高越城の眼下には、歴史に想いを馳せるにふさわしい、この上ない絶景が広がっています。



高越城本丸



高越城からの眺め

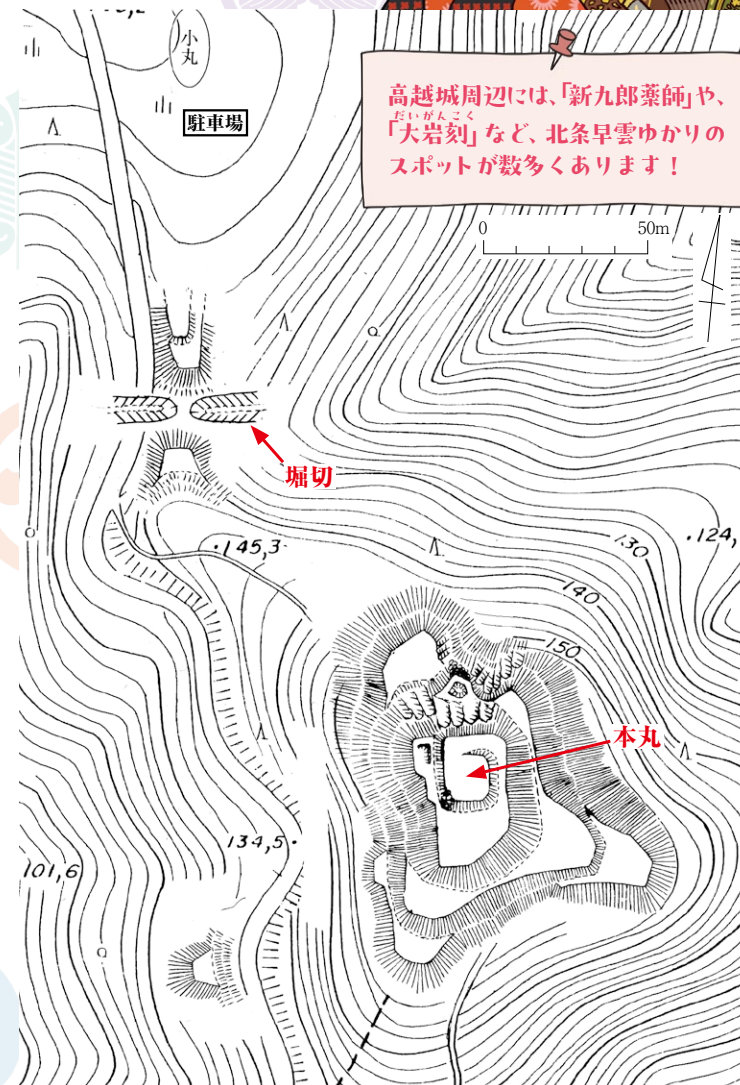
ひとあし延ばして「法泉寺」にお参りしよう！

法泉寺は、永享2年（1430年）に伊勢盛定が古澗仁泉和尚を招いて創建したとされる曹洞宗のお寺です。境内には盛定、早雲のお墓があります。法泉寺には、早雲の肖像画や禁制など、ゆかりの寺宝が数多く伝わっています。



北条早雲

高越城周辺には、「新九郎薬師」や、「大岩刻」など、北条早雲ゆかりのスポットが数多くあります！



高越城縄張り図【井原市史】 通史編より引用、加筆しました



法泉寺（井原市）

小田原北条五代の祖！北条早雲

伊勢新九郎盛時（宗瑞）、通称北条早雲は備中伊勢氏の出身です。伊勢氏本家は室町幕府の政所執事を務めた家柄で、分家にあたる備中伊勢氏は近習中次衆を務め、荏原荘（現在の井原市域）を支配し、高越城を居城としました。早雲は高越城で生まれたと伝わっています。

早雲の父盛定は本家伊勢貞国の娘を妻とし、幕府の中枢で活躍しました。早雲の姉が駿河国今川氏に嫁いだため、早雲も今川氏と深い関係を持ち、やがて室町幕府の命のもと、伊豆国を平定し、さらに相模国を手中に収め、戦国大名北条氏の礎を築きました。

小田原北条氏の家臣団の中に、井原から早雲とともに関東に向かった平井氏、笠原氏、井上氏などの名が見えます。

猿掛城(矢掛町/倉敷市)



標高約240mの丘陵に築かれた猿掛城は、眼下を流れる小田川が両脇の丘陵に挟まれて最も狭くなる要衝に位置しています。鎌倉時代に庄家長によって築かれたと伝わり、室町時代には備中守護代になるほど勢力を拡大した庄氏の本城となりました。

山頂部分は、南北に6つの曲輪が連なる連郭式の構造をしていて、さらに小田川に面した尾根筋にも「寺丸」「太夫丸」と呼ばれる曲輪が築かれています。

戦国時代に入り、備中守護細川家と細川京兆家が対立すると、猿掛城主庄元資は京兆家につき、備中守護細川勝久と抗争を繰り広げました。明応元年(1492年)と同3年(1494年)の二度にわたり猿掛城を攻撃され、激しい戦いが起きたといえます。この戦いで、庄氏方の香西氏が城内で自害したといい、その供養のための位牌堂が寺丸に建てられたと伝わります。

その後、庄氏は尼子氏との結びつきを強めますが、毛利氏や三村氏によって猿掛城は幾度も攻められ、最終的には毛利氏の支配下に入り、毛利元就の四男毛利(穂井田)元清が城主となりました。豊臣秀吉による「備中高松城の水攻め」の際には、毛利輝元が猿掛城に入り、毛利方の本陣として重要な役割を果たしました。

やがて元清は、猿掛城の西に位置する茶臼山に城を築いて移り、関ヶ原の戦いの後に、猿掛城はその役目を終えたとされています。



洞松寺 (矢掛町)

戦乱に翻弄された名族 備中を代表する国人「庄氏」

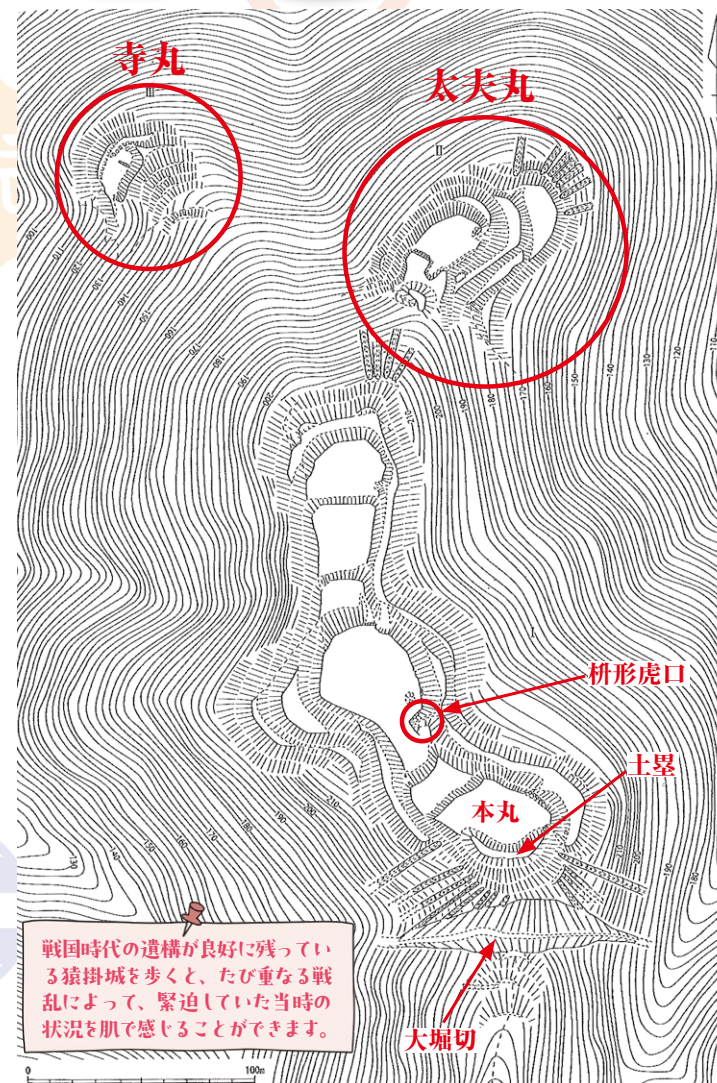
庄氏は、武蔵国児玉郡(埼玉県本庄市)を本拠とする武蔵七党児玉党の庶流にあたります。庄太郎家長が源頼朝の挙兵に従い、一ノ谷の戦いや壇ノ浦の戦いなどで活躍し功を上げ、備中国に地頭として入りました。はじめは、幸山城を築き本拠としたと伝わり、やがて猿掛城を築き、移ったといえます。

戦乱の渦に翻弄されながらも、備中の戦国時代を代表する存在となった庄氏。その足跡は、今もなお、猿掛城や菩提寺である洞松寺に色濃く残されています。洞松寺は、応永19年(1412年)に庄氏によって中興されたと伝わる寺で、庄氏の菩提寺として繁栄しました。境内には、庄元資の墓と伝わる供養塔が静かに佇んでいます。

猿掛城は、矢掛町横谷側と倉敷市真備側の2ルートから登城することができます。息を切らして登ると、たび重なる戦乱の舞台となった猿掛城の見事な遺構が姿を現します。

とくに本丸背後の幅約30m、15mの堀切は圧巻です！

麓には川湊があったと伝わります。



戦国時代の遺構が良好に残っている猿掛城を歩くと、たび重なる戦乱によって、緊迫していた当時の状況を肌で感えることができます。

\\ 猿蟹合戦じゃないよ //

猿掛合戦

備中を揺るがした戦国の攻防戦！

戦国時代、備中では守護細川勝久と守護代庄元資^{もとすけ}の対立をきっかけに、国中に戦乱が広がりました。そして、その後、庄氏の当主となった庄為資^{ためすけ}は、天文2年（1533年）に備中松山城を攻略して城主となり、代々の居城である猿掛城に、一族の庄実近を入れました。

この頃、庄氏は大内氏に従っていましたが、大内義隆^{かきゆ}が家臣陶晴賢^{いへちか}に討たれると、尼子氏に鞍替えし、これにより大内方の鶴首城主三村家親と対立することになります。

天文21年（1552年）、家親は毛利氏の支援を受けて、庄氏の猿掛城を攻撃。一度は、庄氏が決死の防戦でこれを退けましたが、永禄2年（1559年）に、再び攻め寄せられました。この二度にわたり、猿掛城で繰り広げられた庄氏と三村氏の戦いが「猿掛合戦」と呼ばれる戦いです。結果、庄氏は三村氏の侵攻に耐えきれず、家親の長男元祐^{もとすけ}を養子に迎えることで和睦。これにより、山頂部の本城エリアには三村氏が入り、庄氏は中腹の「太夫丸」に移ったと伝えられています。猿掛合戦は、備中の戦国史を語る上で欠かせない、とても重要な戦いなのです。



そして、さらなる戦乱
「備中兵乱」が巻き起こります！



毛利元清宝篋印塔（洞松寺）

\\ 三村氏 VS 毛利氏 備中兵乱！ //

天正2年（1574年）、毛利氏が宇喜多氏と同盟を結んだことにより、三村氏は毛利氏から離反。三村氏は当主家親を宇喜多直家に謀殺されており、どうしても宇喜多氏とは相容れない関係だったため、三村元親^{もとちか}は毛利氏との手切れを決意したのです。これにより、「備中兵乱」と呼ばれる戦乱が起き、結果として猿掛城をはじめとする三村氏の諸城がことごとく落とされ、三村氏は滅亡しました。その後、猿掛城には毛利元就の4男元清が入りました。

毛利元清が築いた城

茶臼山城（矢掛町）

登山口まで

駐車場あり

最寄り駅

矢掛駅
三谷駅



30分



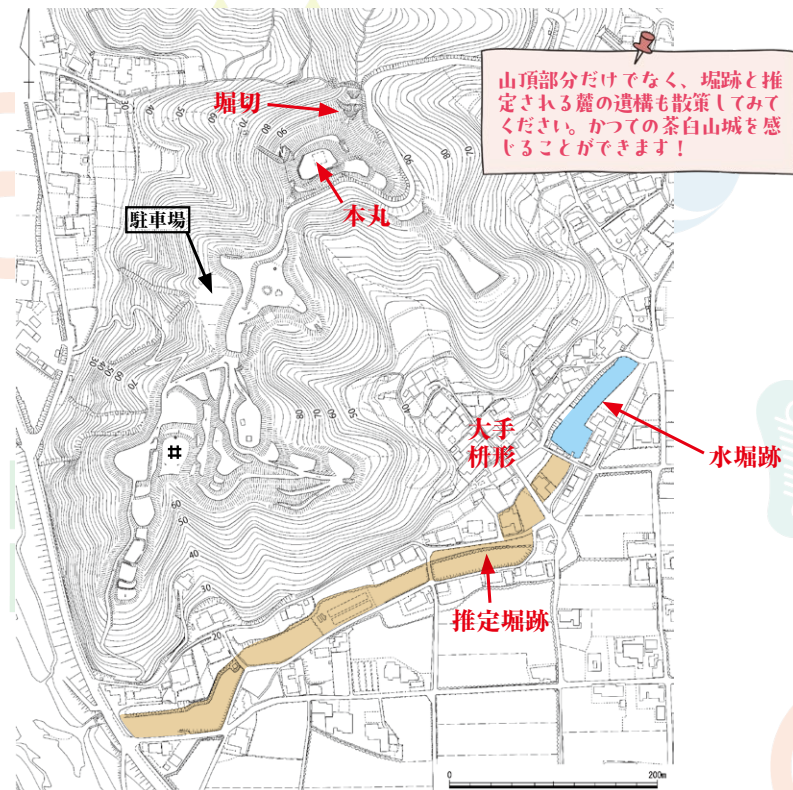
茶臼山城は、標高約150mの茶臼山山頂に築かれ、現在は「茶臼山文化の丘」として整備されています。

茶臼山城は、もともと毛利氏家臣の江木半四郎が築いたとも伝わりますが、天正12年（1584年）に毛利（穂井田）元清によって本格的に築かれたと考えられています。その後、元清が安芸の桜尾城に移ると、茶臼山城には城代が置かれました。

九州征伐や文禄・慶長の役の際に、豊臣秀吉が茶臼山城にたびたび立ち寄ったと伝えられており、そのことからこの城が当時いかに重要視されていたかがうかがえます。そして、関ヶ原の戦いを経て、その役目を終えたと考えられています。

山麓には、南から東にかけて幅約15m、全長約600mにおよぶ堀が設けられており、かつては小田川の水を引き込んだ水堀だったと伝わります。この堀には枡形大手門が設けられていたと想定されており、今もなおその痕跡を見ることができます。

茶臼山城麓の堀跡



山頂部分だけでなく、堀跡と推定される麓の遺構も散策してみてください。かつての茶臼山城を感じることができます！

茶臼山城縄張り図「岡山県中世城跡総合調査報告書 第2冊 備中編」より引用、加筆しました
岡山県古代吉備文化財センター提供

滝山合戦 神辺城奪還をめぐる攻防戦の舞台！

滝山合戦は、正霊山城を本拠とする国人藤井皓玄と、毛利氏の家臣で滝山城主の穴戸孫六郎が繰り広げた戦いです。皓玄は、神辺城主山名理興の二番家老と伝えられる重臣です。毛利氏と尼子氏が抗争を繰り広げる中、尼子方についた理興は、大内・毛利連合軍に神辺城を攻められ、激戦の末、落城。理興は脱出するも、その後は没落したといわれています。

その神辺城を奪い返すべく、永禄11年（1568年）、皓玄は尼子氏残党の蜂起に呼応して挙兵。神辺城を攻めるにあたり、まず、毛利家臣の穴戸氏が守る滝山城を攻撃しました。これによって起きたのが「滝山合戦」です。皓玄が滝山城を攻めたのは、神辺城を攻める際に毛利軍から挟撃されるおそれがあったためと推測されます。

滝山城を落とした皓玄はついに神辺城を奪取。しかし、すぐさま毛利軍の反撃を受け、皓玄は備中国浅口郡に逃亡するも、討ち死にしたと伝わっています。毛利軍は、藤井氏の本拠にも攻め込み、高屋城や山中で戦いが繰り広げられますが、約3ヶ月後、毛利氏によって鎮圧されました。現在、笠岡市西大島には「藤井皓玄の墓」が残されており、彼の壮絶な最期を今に伝えています。



合戦の激しさを物語る
お墓が残ってるよ！



出土した五輪石塔群

滝山城の南側には、「合戦場」という字名が残っており、その周辺からは、頭蓋骨や五輪塔、武具片が出土したといえます。また、「合戦場」近くには、穴戸孫六郎の墓と伝わる供養塔（通称「武将墓」）も残されています。



武将墓（伝穴戸孫六郎の墓）

毛利氏家臣穴戸氏の城！
「滝山合戦」の舞台

滝山城（井原市）

登山口まで

駐車場あり

最寄り駅 子守唄の里高屋駅

20分

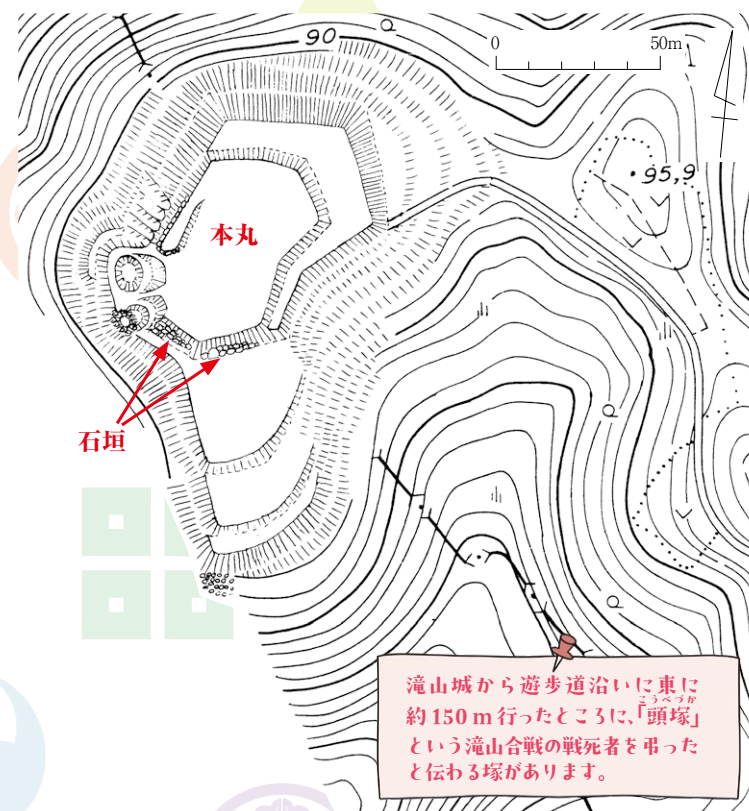


滝山城本丸

滝山城は、岡山県と広島県の県境に位置し、かつては備中国と備後国の境界にあたる交通の要衝に築かれました。山陽道が通り、高屋川が流れる平野を眼下に望む立地や、南へ進めば笠岡方面へ街道が通じることから、監視、防衛の拠点としての重要性がうかがえます。

現在は採石や耕作によって一部が改変されていますが、主郭の南辺から南西辺には野面積みの石垣が残り、往時の姿を今に伝えています。

滝山城の築城時期などの詳細は不明ですが、天文年間（1532―1555年）に毛利氏の家臣穴戸孫六郎が在城していたと伝わります。そして、永禄11年（1568年）には、神辺城の奪回を狙う藤井皓玄に攻められ、「滝山合戦」の舞台になりました。



滝山城から遊歩道沿いに東に約150m行ったところに、「頭塚」という滝山合戦の戦死者を祀ったと伝わる塚があります。

滝山城縄張図『井原市史』 通史編より引用、加筆しました

山名氏家臣藤井皓玄ゆかりの城 正霊山城 (井原市)

登山口まで 駐車場あり

最寄り駅 井原駅



正霊山城は小田川と宇戸川の合流地点にあたり、さらに直下に街道が通る交通の要衝に築かれた城です。現井原市役所芳井支所の背後にそびえる標高約110mの山が城山です。

神辺城主山名理興の重臣藤井好重が築城したと伝わり、その子、皓玄も正霊山城を本城として活躍したといえます。正霊山城の南方約5kmに位置する高屋城も藤井氏の城と伝わっています。

皓玄は、主人山名氏の居城である神辺城が毛利氏に奪われると、奪回を狙い、毛利氏と戦いました。

山頂に残る堀切や土塁、曲輪などの遺構は、今も良好な状態で往時の姿を伝えています。主郭から眼下を見下ろせば、麓にはのどかな集落が広がり、かつてこの景色の中に藤井氏の屋敷があったのではと、想像をかき立てられる歴史あふれる光景が広がっています。



正霊山城の堀切



岬状に張り出した丘陵の突端に築かれた正霊山城は、遠目にもとても目立ちます。地域のシンボルとして、いまなお、存在感を放っています。

正霊山城縄張図『井原市芳井町史 通史編』より引用、加筆しました

ダイナミックな遺構が残る山城 高屋城 (井原市)

登山口まで 駐車場あり

最寄り駅 子守唄の里高屋駅

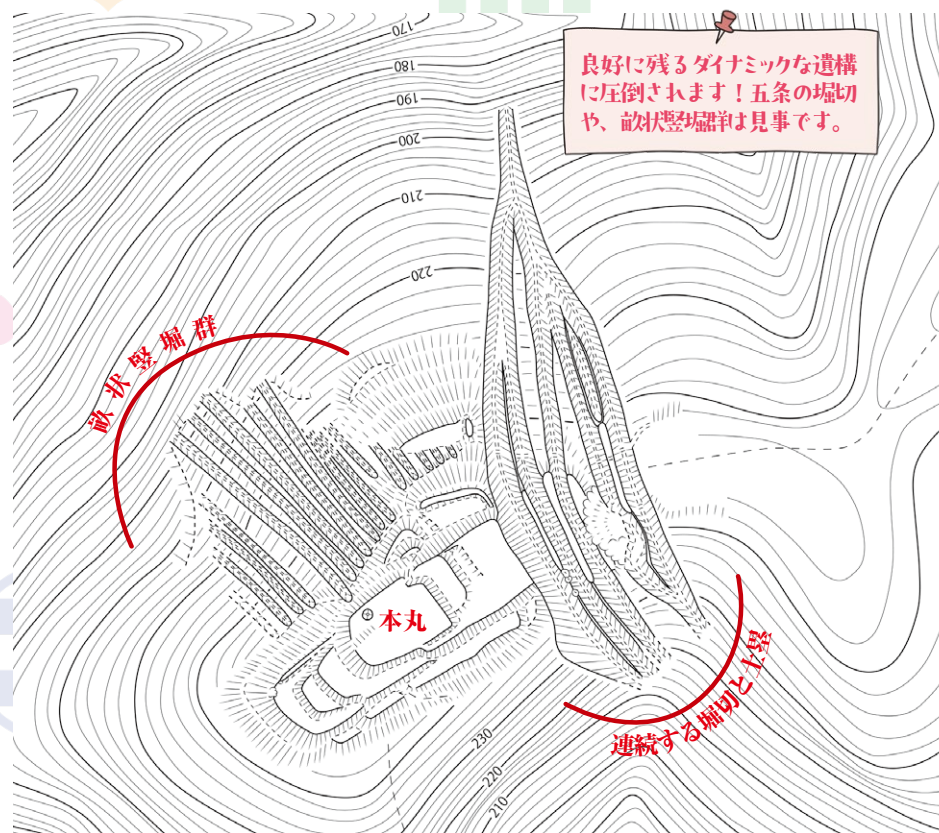


高屋城はコンパクトながら、堀切や土塁、20本近い堅堀などの防御施設が随所に施された堅固な山城です。最大の見どころは、尾根筋を断ち切る連続した堀切と土塁の遺構です。また、堀切の両側は堅堀と連なり、山の斜面下方まで続いています。長いもので約100mの長大な堅堀は圧巻です。これらの遺構から、当時の高屋城が置かれていた緊迫した状況を感じることができます。

城主は藤井皓玄と伝わります。永禄11年(1569年)、皓玄は毛利氏と敵対し、神辺城をめぐる戦いを繰り返します。高屋城は、藤井氏の本城である正霊山城の前線にあたることから、当時、皓玄の息子広吉が守備していたと伝わりますが、最後は落城し、以後毛利方の城となったといえます。



高屋城の堀切



良好に残るダイナミックな遺構に圧倒されます！五条の堀切や、畝状堅堀群は見事です。

畝状堅堀群

連続する堀切と土塁

高屋城縄張図『岡山県中世城跡総合調査報告書 第2冊 備中編』より引用、加筆しました
岡山県古代吉備文化財センター提供

神辺城 (福山市)

最寄り駅 神辺駅

登山口まで



駐車場あり



神辺城は、標高133mの黄葉山に築かれた山城で、備後南部の要衝として長く地域支配の拠点となりました。山頂に本丸を置き、西に延びる尾根に主要な曲輪が連なる構造で、城内からは神辺平野を一望できます。

神辺城は鎌倉幕府滅亡後に、後醍醐天皇の家臣朝山景連によって築かれたと伝わります。景連は、建武新政府から備後守護に任じられており、神辺城はその守護所であったと考えられています。

戦国時代、城主となった山名理興は、尼子晴久と激しい戦いを繰り広げていた大内義隆に味方していましたが、その後、尼子方に寝返ります。これにより、大内・毛利連合軍が神辺城を攻撃し、「神辺合戦」が繰り広げられました。最終的にこの戦いは大内・毛利方が勝利し、杉原盛重が城主として置かれました。その後、理興の旧臣藤井皓玄による神辺城奪取事件や、杉原氏の内紛を経て、神辺城は毛利氏の直轄管理に移り、毛利元就の8男毛利元康が入城しました。元康が王子山城に移ると、神辺城は、毛利氏の支城のひとつになったと考えられています。

関ヶ原の戦い後、安芸・備後を拝領した福島正則は、神辺城を支城として代官を派遣しました。この時期に石垣が築かれ、近世城郭へと姿を変えたと考えられています。しかし、一国一城令によって神辺城は取り壊され、さらに、福島氏の改易後に、水野勝成が福山城に入ると、神辺城はその役目を終えました。本丸南東部には、石垣が今も残り、戦国から近世への時代の移り変わりを感じさせてくれます。神辺城は、時代の転換期を象徴する貴重な史跡といえます。



神辺城の堀切



神辺城の石垣

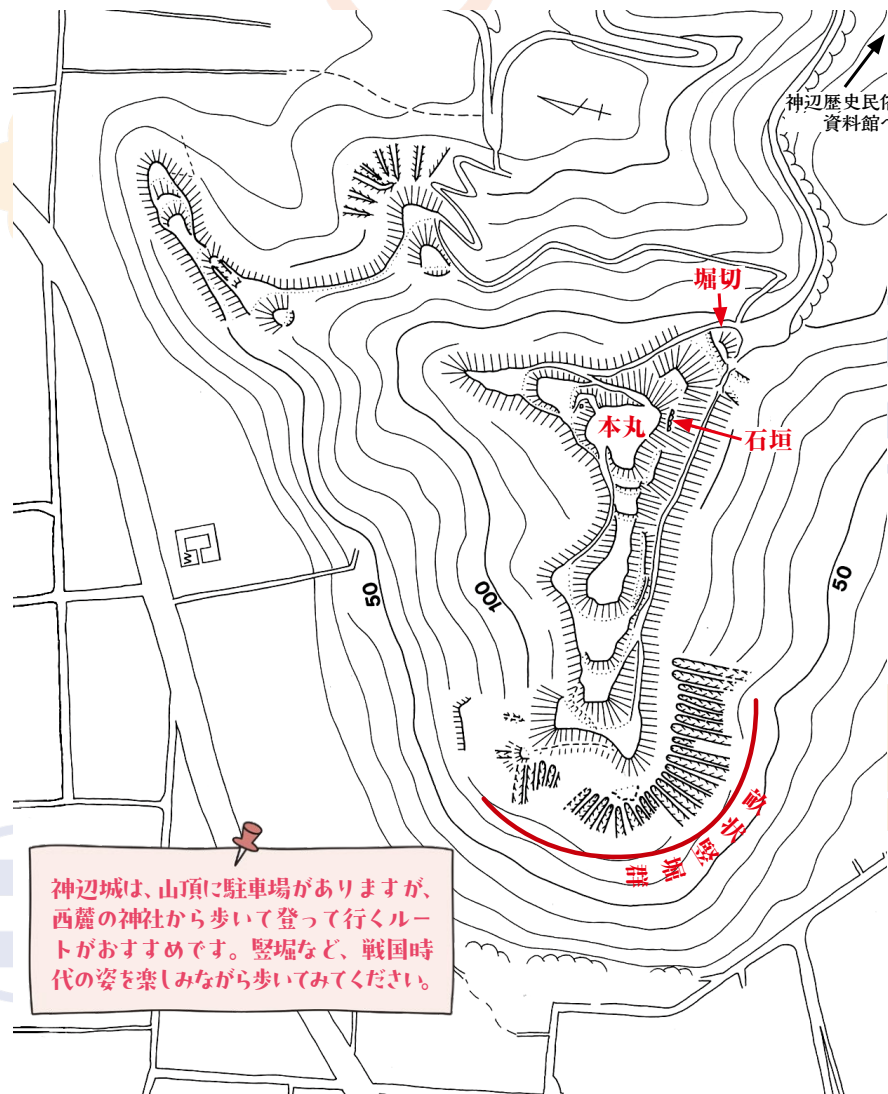


神辺城からの眺め

城下でくり広げられた神辺合戦

神辺合戦は、神辺城主山名理興が大内氏から尼子氏に寝返ったことによって、起きた戦いです。天文12年(1543年)からなんと6年にわたって、神辺城では戦いが繰り広げられたのです。神辺城下の「固屋口」「七日市」などでの激しい戦いや、小早川隆景の軍勢が城下に攻め寄せたことなどが記録に残っています。

神辺城跡にある神辺歴史民俗資料館では、神辺城から出土した瓦などの遺物が展示されており、戦国時代の城の姿をより深く学ぶことができます。また、神辺地域のさまざまな時代の歴史や暮らしに関する展示も充実しており、地域の歴史と文化を楽しく知ることができます。



神辺城は、山頂に駐車場がありますが、西麓の神社から歩いて登って行くルートがおすすめです。竪堀など、戦国時代の姿を楽しみながら歩いてみてください。

軽部山城(総社市)

登山口まで 最寄り駅 清音駅 10分 駐車場なし

かるべさん
軽部山城は、標高約240mの軽部山から南西に延びる標高約190mの尾根上に築かれた山城です。高梁川を挟んだ南東側には南山城が位置することから、戦略的な立地に築かれていることが見て取れます。

軽部山城は、東西に並ぶ二つの曲輪群から構成され、その間には幅約15mの大規模な堀切が設けられています。東側の曲輪群は構造がしっかりしており、本丸であったと考えられています。

一方、西側の曲輪群には、南に張り出した尾根上に土塁で囲まれた遺構が残っており、南側の谷筋に対する防御を意識した、より戦闘的な構造がうかがえます。

築城時期や築城主についての記録は残っていませんが、現地には戦国時代の山城の姿が色濃く残されており、往時の緊張感を今に伝えています。



軽部山城の堀

伽藍山城(矢掛町)

登山口まで 最寄り駅 矢掛駅 小田駅 60分 駐車場なし

がらんやま
伽藍山城は、南北に並ぶ二つの頂部にそれぞれ曲輪群が築かれていて、その二つの城郭を総称して「伽藍山城」と呼んでいます。北側の郭は南側よりも規模が大きく、構造も堅固で、眺望にも優れていることから、本丸であったと考えられています。現地には堅堀や堀切といった防御施設の遺構が良好に残り、自然の地形を巧みに活かした山城の構造を体感することができます。

築城の時期など詳細は明らかではありませんが、毛利氏の家臣戸氏氏が在城していたとも伝わっています。

伽藍山は、かつて、行基創建と伝わる寺院の伽藍があったことが名前の由来となっています。地元ではハイカーに親しまれるハイキングコースであり、ほどよい山登りが楽しめる山です。

また、伽藍山は矢掛町のどこからでも眺めることができ、古代においては条里制の基準になった山だとされています。



伽藍山城の本丸



伽藍山城の堅堀

鳥ヶ岳城(倉敷市)

登山口まで 最寄り駅 備中呉妹駅 20分 駐車場なし

とりがたけ
鳥ヶ岳城は、小田川と山陽道を望む交通の要所に築かれた山城です。地元の伝承によれば、鎌倉時代に木曾義仲を討ち取ったことで知られる相模国の御家人石田二郎為久が在城し、のちに山麓に居を構えたと伝えられています。

鳥ヶ岳城の詳細は明らかではありませんが、南西約3kmに位置する猿掛城との関係から、支城としての役割を担っていた可能性も考えられます。鳥ヶ岳城東側の視界は開けており、総社市街や岡山市方面を一望できることから、街道や河川の監視・防衛の拠点として重要な役目を担っていたことが想像できます。



鳥ヶ岳城からの眺め

相方城(福山市)

登山口まで 最寄り駅 JR新市駅 60分 駐車場あり

さがた
相方城は、標高191mの丘陵に築かれた山城で、山頂からは、東に神辺平野や神辺城、さらに井原方面へ続く山陽道が一望できます。西側には府中市街が広がり、四方を見渡すことができる絶好の眺望スポットです。

相方城は、戦国時代に毛利氏に味方した国人領主有地氏の居城だったと伝わります。有地氏は、宮氏の庶流にあたりますが、宮氏が尼子氏に味方したため、両者は敵対関係となり、有地氏は宮氏の亀寿山城を攻め滅ぼすなど、この地を舞台に熾烈な戦いが繰り広げられました。

その後、有地氏が領地替えとなると、相方城は毛利氏によって大規模な改修が行われたと考えられています。毛利氏によって慶長年間(1592-1600年)に築かれたとされる見事な石垣が、訪れる者を楽しませてくれます。



相方城の石垣

歴史のない土地はなく、その地域に眠る珠玉の物語を今に伝えてくれるのが、各地に残る城跡です。とくに山城は、地域の歴史を肌で感じられる貴重なスポット。汗をかき、息を切らして登った先に広がる景色は、ただの風景ではなく、かつての人々の営みや戦いの記憶が重なった“歴史の舞台”です。足を運び、体で感じることで、過去と今がつながる瞬間を味わえます！

